〔東京家政大学研究紀要　第41集　(1), p. 9～18, 2001〕

国民国家とエスニシティのはざま

—大英帝国のアイルランド政策—

荻野　治雄

(平成12年10月5日受理)

Conflicts between Nation-State and Ethnicity

—British Policies of Segregation and Assimilation in Ireland—

Haruo OGINO

(Received on October 5, 2000)

キーワード：アイルランド人の「ケルト性」，オールド・イングリッシュとニュー・イングリッシュ，キルケニー諸条例，ゲーリック・アイルランドとアングロ・ノルマン・アイルランド，プロテスタント優位体制

Key words：'Celtic-ness' of Irish people, old English and new English, the statutes of Kilkenny, Gaelic Ireland and Anglo-Norman Ireland, protestant ascendancy

本稿はアイルランドが大英帝国により植民地化されていった過程とその原因を英国の国民国家化とアイルランドの民族性を中心に分析する．

1916年4月24日イースターの月曜日，アイルランド義勇軍と市民軍はダブリンの拠点を占拠し，アイルランド共和国を宣言した．いわゆる「イースター蜂起」である．宣言文には「アイルランド人民はこれまで，あらゆる世代において，民族にはその自由を得る権利があると主張してきた」とあった．1週間でイギリス軍により鎮圧されたこの蜂起はアイルランド独立の端緒になった．

「明治維新以降の日本は，国家の独立を維持するために急激な近代化を進めたが，それと平行して西欧帝国主義国のパワーポリティックスを身につけ」，[1] 1910（明治43）年に近代化が遅れていた朝鮮を併合した．1919（大正8）年，朝鮮の独立を求める三・一事件が起こる．日本の統治に対する抵抗と独立への熱望がもたらした激しい独立運動は日本が植民地政策を文化統治に変更するきっかけともなった．朝鮮総督府は事態を重視し帝国主義政策を進めるイギリスに範をとり「朝鮮統治の生きた教科書として」[2] アイルランド統治政策について検討したという経緯がある．第1次世界大戦終結後のヴェルサイユ体制による民族自決と国際協調の潮流が背景にあったから，植民地アイルランドと朝鮮が民族主義に目覚めたのは時代精神の反映でもあった．しかし少数民族を含めて各民族が他の民族の立場を認めて共生するという思想が普遍性をもつ時代ではなかったのである．本稿は紙数の関係もあり，大英帝国によるアイルランド併合までの流れを分析した．

1　国民国家の実像

近代史の特色は，資本主義と絶対主義国家の遺産を引き継いだ国民国家（nation-state）の発展である．フランス革命以降の西欧では人間のアイデンティフィケーションを規定する第一の拠り所は国家（nation）であった．国民国家は，中央主権的な国家管理，国内市場の統合，国民の民族的同質化と標準化をすすめ，工業社会時代を迎えると自国の領土内に画一的な言語・文化を浸透させることを使命とする政治単位となった．しかし実体としては国家の領土の国境と，同種民族社会の境界線が一致することはほとんどなかった．実体としては国家統合の際に異民族を含むことが多く，そのため国民国家は多民族国家になりやすい．したがって，異質の文化・言語集団が含まれることが多い．一国の国民が全く同一言語，同一の文化をもつということはなかったと言ってよい

教養部　英語第一研究室

（この意味では明治維新以降の日本は典型的な国民国家を建設したと言ってよいだろう）．そのため国民意識の統合を図るため文化，言語，生活様式の一体化が強調され，「想像の共同体の実体化のため強力な同化政策が採用され，各民族の民族自決が否定されることになる」．[3] 一国のなかに支配＝被支配の関係を内臓する組織になる．したがって，民族自決とナショナリズムに基づく国民国家はこの意味では擬制であり，アンダーソンの言う「想像の共同体」(imagined community) [4] であるとも言えよう．

2　英国における国民国家の成立

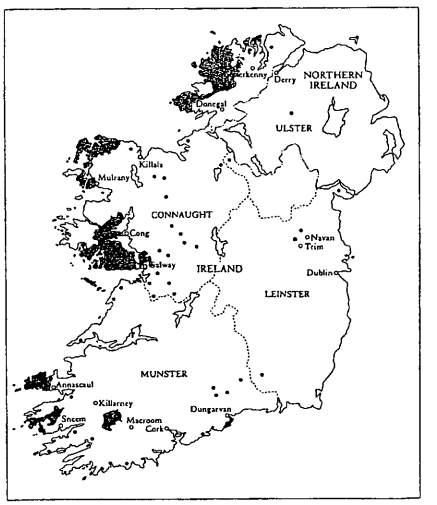
既に10世紀以前のアングロ・サクソン時代に統一王朝が形成されていたが，イングランドが統一王国としてのまとまりを強めたのは，1066年にノルマンディーの領主ギョーム（英名ウイリアム）によって征服されてからである．彼は，ドゥームズデイ・ブック（土地台帳）を作成し，聖・俗裁判所の機能分化と封建制度による国家の統一を進めていった．英国は近代国民国家のモデルとされているが，中世における小国家形成の歴史を経た上で国民国家が誕生している．14世紀ごろまでには，当時の西欧では比肩するもののない強力な中央集権的封建国家に成長した．王権は世俗の権力を代表し，法王権と対等とした．ウエールズは1543年にイングランドに併合された．[5] しかしアイルランドは部分的な征服にとどまり支配者であるノルマン人の文化と被支配者であるケルト人の文化という二重構造が生じた．[6]

英国がイギリス帝国 (the English Empire) から大英帝国(the British Empire) へと転換したのは18世紀中葉である．つまり Celtic Fringes（ケルト辺境，周縁人）を含めたイギリス人 (British) としての意識統合が進んでからである．その背景には反カトリック，反フランスの旗印と重商主義の進展がある．スコットランドは，長老派教会（プレスビテリアン）で，特に南部が既に1707年の合同までにはかなりの程度英国化が進んでいたので，比較的抵抗もなく大英帝国の一員になりイギリス重商主義の中心にある航海法 (Navigation Act) 体制の中に組み込まれて近代世界システムにおける活動の場を与えられた．しかし，スコットランドは国民国家となる機会を失うことになった．[7]

一方，カトリック色の強いアイルランドの併合はスコットランド合併からほぼ1世紀経過した1801年であった．カトリック・アイルランドでは19世紀をつうじて激しい自治独立運動が展開され，1921年にはプロテスタントの多い北部6州を除く地域が自治権を得て事実上独立した．北アイルランドの人口は154万（1991年）である．アイルランド共和国は298万で，ゲール語 (Irish Gaelic) は憲法で第一公用語 (the first official language) として定められている．ゲール語を日常的に使用している地域 (gaeltacht) にはアイルランド語放送局がある．しかし全人口のうちゲール語人口は2％以下に過ぎない．[8]

19世紀のウエールズとスコットランドでは激しい独立運動こそなかったが，国民意識の重層性は明らかである．British という自己認識はあったが，English（イングランド人）に同化しているわけではない．[9]

こうして大英帝国は多民族で構成される非集権的国民国家になった．しかし，第2次世界大戦以後の脱植民地化 (Post-Colonial) 時代に入ると，「連合王国」への求心力が急速に薄れて地域ごとの独自性が強調されるようになりエスノ・ナショナリズムがよみがえりつつある．



The Irish language. Shaded areas are officially designated Gaeltacht areas. (.) indicates points outside the Gaeltacht covered by Heinrich Wagner's *Linguistic Atlas and Survey of Irish Dialects* (Dublin, Dublin Institute for Advanced Studies, 1958–69); the availability of informants reflects the geographical spread of Irish as a community language in the last decades of the 19th century.

3　出自としてのケルト

混血が繰り返された結果今日では純血のケルト人は存在しない．しかしゲール地方の住民は人間的感情に溢れ，行動の予測が難しく，情熱が激しいと言われる．歴史をたどるとアイルランド性 (Irishness) あるいはアイリッ

シュ・アイデンティティを解く鍵は「ケルト」にあると思われる.

ケルト人が中央ヨーロッパを制覇したのは紀元前6世紀ごろと推定されている. 青銅器時代である. より進んだ鉄器をもったケルト人がブリタニアから海を渡ってアイルランドに達し, 定住したのは紀元前150年ごろのことである.

パックス・ロマーナ (Pax Romana) に象徴されるようにローマ帝国は極めて政治的な国家であった. しかしヨーロッパ時代を含めてケルトはローマと異なり政治的な国家にはほど遠かった. ヨーロッパ時代から一つの政体としての緊密な関係をもった社会を作らなかったケルト人は永続する政治権力をもつことができなかった. 帝国主義者であったローマ人やノルマン人は統合の技術によって才能を発揮したが, アイルランド人が才能を発揮したのは分散と分離によってである. 11世紀まではこのように言える. この時代までにアイルランド人が作り出した製品は同時代のヨーロッパのものより優れていた. しかし他のヨーロッパ諸国が, 科学, 芸術, 戦争技術などの点で発展し他の中央集権が遅れた国を打ち破った時代になっても, アイルランドは未開の状態にとどまった.

ケルトの顕著な特質は個人主義であり, それが部分的には16世紀まで色濃く残っていた. アイルランドの政治的弱点はこの個人主義に起因すると言えよう. 他の民族の圧迫により, アイルランドに定住した後も民族同士の権力闘争を続け, この状況はイギリスによって征服されるまで続いた. 部族間の対立が続いたためアイルランドには中央集権的政治体制が実現しなかった. アイルランド人の政治的統一への無関心と彼らのケルト民族としての言語的, 感情的一体感は矛盾するように見えるが, 彼らの民族としての強力な一体感は彼らの地域主義の範囲にとどまったのである. そのため民族としての繁栄に必要な国民 (nation) としての一体感には無関心であった.「ケルト人の社会体制の土台を徐々に切り崩していく歴史的役割を果たしたのは教会だったが, しかしこの制度は, ヨーロッパ大陸の社会発展に照らせば, 強力な中央集権制によって外から破壊される運命にあったのである. …アイルランドの教会は強力な専制君主の支配を受けた中央集権的国家体制の欠如に狼狽しなければならなかった」[10]「ケルト人は…知的整合性ではなく, 情動の絶えざる揺れにバランスを見出そうとする傾向をもっていた」というオフェイロンの指摘には深い洞察と説得力がある.[11]

4 二つの社会 ── ゲーリック・アイルランドとアングロ・アイルランド

アイルランドは既に5世紀中ごろには聖パトリックの布教によりキリスト教が広められた. アイルランド人は「悪魔や天使をアニミズムとして信じる段階を脱したことがなかった. キリスト教は, したがって, 思想と呼べるような思想の乏しい異教を簡単に押しのけることができた」[12] のである. アイルランドでは修道院を中心とする独自のケルト教会が発展を遂げていた. 西ヨーロッパの宗教界を支配するようになったローマ教会はアイルランドのローマ化を図り, 教皇ハドリアヌス4世がアングロ・ノルマン王ヘンリー2世にアイルランドの領有権を与えた. ヘンリーはアイルランドに侵攻し, 1175年, ローリー・オコナーとの間にウインザー条約 (the Treaty of Windsor) を締結した. この条約により, オコナーは一部地域を除くアイルランドの高位の王 (high-king) であると認められたが, アイルランドはその見返りにイングランドの宗主権を承認せざるをえなかった. ノルマン人は平野部に, 丘陵地帯, 沼沢地, 森林は先住民のものとする住み分けが行われた. 特にレンスター (ダブリンの後背地) とマンスター (南部はノルマン系封建貴族の領有) はノルマン化され, ダブリンには聖パトリックのような大聖堂が建立された. やがてスウィフトが首席司祭を勤めるようになるのはこの聖堂である. 古代のアイルランド社会では農民は自由土地保有権者であった. しかしヘンリーは条約を守らず, アイルランド人が所有していた土地もノルマン系封建貴族に分与したからアイルランド人は借地農として貧困に苦しんだ.

しかし, 中世においてはイングランドがアイルランドにおいて一元的に支配権を確立するまでにはいたらなかった. そのため, 先住のゲール系封建領主が支配するゲーリック・アイルランドとイングランド系領主の支配するアングロ・アイルランドという民族文化的に異なる2つの地域が出現した. 一方, 政治的には囲い地 (the Pale) の中 (ダブリン周辺) と外という区割りができあがった. イングランドの支配が及んだのは4地域に過ぎない.

ヨーロッパを席捲していた黒死病が1348～49年にアイルランドを襲い, ダブリンとドロヘダの町はわずか数週間のうちに住民がほぼ絶滅した. 疫病により恐慌状態に陥った多くの植民者はイギリスへ脱出した. このため

植民地が衰微していったが，それは疫病のみが原因ではなく，この時期のアイルランドはいたる所がゲール的なものの復興期にあったことのはうが大きな理由である．しかしゲール系アイルランド人が頼みとしたスコットランド国王の弟エドワード・ブルースは植民地を攻めたものの結局は壊滅できず，アイルランド王国を建設し，植民者を追い出そうという企ては彼とともに終りをつげた．それから後，ゲールの復興は国民的な指導者を得ることができず，その衝撃は中世の終りまで続いた．

5　キルケニー諸条例の制定

アイルランドでは，既に13世紀末にはアイルランド人とアングロ・ノルマン族の同化が進んでいた．アイルランドを占領したいかなる権力も，その目的にかなうだけ十分広汎かつ恒久的で揺るぎないヘゲモニーを樹立することはできなかった．「全体的に見ると，アングロ・ノルマン族という侵入者を文化的に同化させ，彼らをいわゆる旧イングランド人からなかばゲール化した集団へと次第に変貌させていったのは，現地人たるアイルランド人のほうだったのである」．[13] 第三代デズモンド伯は「アイルランド人自身よりもアイルランド人的」になったといわれる文化的同化作用の完璧な実例である」．[14]

植民者の多くはアイルランド人の家族と通婚していたというのが実体であったので，アイルランド議会はその脅威を除去しようと図った．

1361年アイルランド総督として赴任したクラレンス公ライオネルはアングロ・アイリッシュのこれ以上の「堕落」(degeneracy) を防ぐために1366年キルケニーに議会を召集してイギリス人がアイルランド人と同化することを禁止する35の法からなるキルケニー法 (The Statutes of Kilkenny) を制定，公布した．

The statutes codified over fifty years of colonial legislation against magnates quartering their armies in 'the land of peace', waging private wars, and making private peace with rebels, against the use of March or Brehon law instead of English common law, against degenerate English who wore Irish costume and spoke Irish, against intermarriage and fosterage with the Irish enemies...[15]

イギリスは「隔離政策」を採り，囲い地を作ってアイルランド人との接触を禁止した．現代のアパルトヘイトである．ブレホン法（アイルランドの慣習法）の裁判を受け入れたり，アイルランド語を話したり，結婚したり，土着民の慣習に従う植民者（アングロ・アイリッシュ）は反逆者であるとされた．

イギリス人はインド経営でもわかるように各地域の植民地支配を通じてイギリスの文化と生活の規範を維持し超越的な姿勢を崩さなかった．キルケニー法はその原点ということができよう．イギリス人は人種差別主義的傾向が強く，「異人種間結婚と汚染（混血による汚染）の亡霊が，イングランドをさまよった」．[16] イギリス人の民族性を如実に示しているものと言えよう．

しかしイギリス政府の政策にもかかわらず，植民者たちはアイルランドの多くの部分において文化的にドップリ浸りきってしまっていた．イギリスはフランスとの間に始めた百年戦争のためにアイルランドへ軍隊を送る余裕もなくなった．モンゴメリーはこう書いている．「時の経過とともに徐々にそして確実に，ケルト人の慣習がイギリス法を無視して広がっていき，ますますアングロ・アイリシュが土着の人種と同義語となっていった」[17] ヘンリー4世時代の終わりには，下院議長が「アイルランドの大部分が土着民によって『征服』されていることを認めなければならなかった」．[18] キルケニー法は同化を防ぐ手段にはならなかったのである．総じて，キルケニーの諸条例はゲール系アイルランド人の勢力回復を阻止することに失敗した．髪型や服装のようなことにおいてさえ，ゲール系アイルランド人風の習慣が支配的であって，そのため1537年に再度それらの習慣が禁止されている．その規定は次のように記されている．

「この地におけるイギリス国王の臣下たる者は何人であれ，耳の上の毛を刈ったり，剃ったりしてはならない．また，頭髪をグリープスといわれる長いまきげのようにしてはならない．さらにまた，上唇の上に生えた毛をクロムミールと呼ばれるような風にしてはならない……」．[19]

モンゴメリーは「ゆっくりとそして確実にケルト人種は，誇り高きノルマンの移民貴族の子孫を同化してきていた．イギリス本土と縁を断って，自分たちが選んだ土地に身を委ねると，土地の微妙な影響や民族の混りによる血統の変化が現われるのは当然のことだった．さらに土地所有の混沌状態は，混合をいっそう進めた」[20] と記している．イギリスの勢力は衰えつつあり，ペイルの境界も狭まりつつあった．16世紀までに移民たちはほとんどみなアイルランドの民族性に同化してしまった．

潜在的にはノルマンとアイルランドの関係の最も実り

のあった分野は宗教であった．しかしその成果は残念ながら政治の分野にはもちこまれなかった．「2つの国家」を切り離しておくためのノルマン人の努力の結果であるキルケニー法はイギリスの修道院と聖職からアイルランド人を除外した．しかし宗教だけではアイルランド人を団結させる力はなく，イングランドに対抗するにもアイルランド側の姿勢が分裂してしまう始末であった．宗教の代替物としての「民族性」あるいは民族共同体意識もアイルランド人を団結させることはなかった．彼らには「民族性」という言葉は意味をなさなかった．他者に対する古い排斥意識はもっていたが，政治的概念としての民族主義は存在しなかった．「しかし，宗教はやはりアイルランドの方向を決める上で侮りがたい影響力をもった．それによってアイルランド人の精神はローマとスペインに向かった．外に向かう動きはアイルランド精神の拡大に役立った．しかしローマへの忠誠とイギリスへの抵抗が混じり合うことは必ずしもよい結果を生まなかった」.[21]

イギリス政府はアイルランドを征服する手段を失った．唯一の方法はデズモンド伯爵やキルデア伯爵のようなアングロ・アイリッシュの領主に統治を任せることであったがこれも危険を伴っていた．ともかくアイルランドはイギリスにとって重荷になっていたが，放置しておくことはできずヘンリー7世はポイニングスを派遣した．彼は1494年の法令によりアイルラン語の使用禁止の規定を削除した．英語が使用されているのはペイルといくつかの町だけになった．1613年には履行が不可能と判断して同法は廃止された．

6　同化政策の開始

絶対王政を確立したチューダー王朝時代におけるアイルランド政策の変更はヘンリー7世の時代に始まった．

Tudor Irish policy began with Henry Ⅶ's decision that all laws made in England were automatically to apply to Ireland, and that the Irish Parliament could only legislate with the King of England's prior consent.[22]

1541年アイルランド議会はヘンリー8世をアイルランド国王と宣言した．アイルランド国王になったヘンリーはアイルランド的なものを一切許さず，イングランドへの完全な同化を強要した．「(アイルランドの)多数の人々はローマ教皇がアイルランドの国王であり，そして歴代のイギリス国王が行使する大守という職は「教皇への忠順のもとにおける統治にすぎない」と信じていた，しかし彼らは今やその幻想から覚された」のである.[23]

当時のアイルランドには，ペイルを除くと「イギリス人反徒」と「敵性アイルランド人」がいた．前者はイギリス国王への忠誠を棄てゲール風の生活様式を取り入れたアングロ・アイリッシュ領主であり，後者はイギリスの威光を無視していたゲールの領主あるいは首長である．イギリスは依然として独自の社会組織――伝統，制度，法，言語――を維持しているゲール系住民に敵意をもっていた．しかしゲール系アイルランド人の伝統はケルトの文化であり，イギリス人と並んで生活してはいたが，実態はイギリス人とは異なる民族(nation)であった．この時期のアイルランドは独自の文化をもち,ゲール語を使っていた．ゲール系アイルランド人に対する同化政策，すなわちアイルランドの植民地化は大英帝国の建設，つまり帝国主義的収奪の第一歩であった．「アイルランドはイギリスの事業と植民の最初の舞台であった」.[24]

ただし，ヘンリー8世はアイルランド問題を平和的に解決することを考えていた．1520年に，彼はアイルランド領主をイングランドに対して忠順にするためには「厳しい取り扱いや‥‥力づくないし武力よりも法や理性に基づく穏やかなやり方，分別ある方向，そしてやさしい説得に」[25]よるべきであるとアイルランド総督に述べている．事実，この方法が成果をあげた．ゲール及びアングロ・アイリッシュ領主のうち40名が帰順し，イングランドの法に従うことを約束した．アイルランドの方式に従って暮らしてきた領主たちはそれぞれの土地をヘンリーに引渡し，それを封建的下付地として再び受領した．いわゆる surrender and regrant である．このようにして「ゲール的慣習法と財産共有制の根絶と，イギリス風の封建的土地保有制の導入が図られた」.[26] すべての者は旧来のやり方を棄てて英語を学び，おおっぴらにアイルランド風な服装を着用することをやめ，国王の領内ではどこでも，言語と服装の一様化をつくり上げることに同意した．これはケルト人の民族性から考えると革命的なことである．

イギリスでは，「国王至上法」(The Act of Supremacy)が1534年に，また「ローマ法王の権威に反対する法律」(The Act against the Pope's Authority)が1536年に制定された．

The Act of Supremacy declared that the King of

England was supreme head of the *Ecclesia Anglicana*, or Church of England－not the pope.[27]

「国王至上法」はイングランド国王がイングランド教会の最高の首長であることを宣言した．ヘンリーはこの方針をアイルランドにおいても実行した．1536年，アイルランド議会はヘンリーを「アイルランドの全教会の地上における唯一の最高権者」とする法律を通過させた．1559年，ヘンリーは礼拝統一法（the Uniformity Act）を制定し，英国国教会が進むべき道を明らかにした．国教会共通祈祷書はプロテスタント色の濃いものであった．

7　土地の収奪 ── アイルランド民族主義の芽生え

1558年，エリザベス1世は国教会を確立した．国教体制が整備されたのは1563年に聖職議会が制定した「三十八ヵ条の信仰箇条」によってである．英国国教会のローマ法王庁からの独立はイギリスルネッサンス期における象徴的な事件であった．英国国教会はプロテスタントではあるが，カトリックの形式性，荘厳性を残しながら,基本的にはカルヴァン主義の立場に立っていた．スコットランドとウエールズはこれを受け入れたが，アイルランド人の圧倒的多数は英国国教会の進出に対し改宗を拒否し，カトリックとしてありつづけ，ローマへの忠誠とイギリスへの抵抗を続けた．このことが今日のアイルランド問題の原因になっている．「宗教はエスニックな情念を，燃え上がらせこそしないにしても，しばしばそれを補強し，宗教とエスニックな情念とが合体して，明確な宗教的でエスニックな共同体が形成されるのである」というスミスの指摘は正鵠を射ている．[28]16世紀の最初の抵抗は1534年のアングロ・アイリッシュの指導者で「絹のトマス」（Thomas Lord Offaly）として知られる第9代キルデア伯（Earl of Kildare）の息子フィッツジェラルドの反乱であったが，これは完全な敗北に終わり，いわゆる「メイヌースの赦免」により生き残った者は全員処刑された．

ノルマンの家系のデズモンド卿がゲールの風習を守り，エリザベス女王に十分な忠誠を見せなかったかどで投獄されると，従兄弟のフイッツモリスはヨーロッパ大陸に渡り，スペインのフイリッペ2世とローマ教皇の支援を受けてカトリック同盟を結成しイギリスに対抗した．ローマ教皇の勅書にはエリザベス女王から王国の統治権を剥奪するとあり，以後，アイルランド人とローマとの精神的な絆が極めて強くなった．デズモンドの反乱は結局鎮圧された．しかしカトリシズムはアイルランド人にとって「イギリスの支配に対する不満のシンボル，民族主義の蕾の最初のシンボルになった」のである．[29]

イギリスの意向をくむアイルランド議会は1560年に，アイルランドをプロテスタント化しようと試みた．しかしカトリック信者であるアングロ・アイリッシュ（ノルマン）とゲール系アイルランド人はカトリシズムを守るために団結しイギリスに対抗した．マンスターは1579年に反乱を起こしたものの1583年までに鎮圧された．反乱を起こした領主の土地は没収され，イギリスからの植民者がそれを引き継いだ．また，アルスターは，1603年キンセールの戦いでスペイン・アルスター連合軍がマウントジョイ総督のイギリス軍に破れ，指導者ティローン伯ヒュー・オニールは降伏し，アイルランドはイギリスに征服された．「それはゲールの首長制の最後のものの没落と，古いアイルランド人の世界の終末を意味した」．[30]

ゲール領主であったオニールとオドンネルがアイルランドを去った「伯爵の逃亡」により，アルスターの広大な土地はイギリスに没収され，その土地に主としてスコットランド低地地方出身者が入植した．こうしてアルスター東北部はプロテスタントであるスコットランド長老会派（プレスビテリアン）の支配下に組み込まれていった．アイルランドの情勢は急激に変化した．チュウダー朝時代と異なり，アルスターへの植民が組織的に行われた．多数のアイルランド人がアルスターから追放されたためここに新たなプロテスタント社会が生まれた．アルスター地域へのイギリス人の植民により，この地域にはイギリス人地主とアイルランド人の小作人という関係が発生した．また同時に伝統的なカトリック社会のなかに国教会徒とプレスビテリアン派植民者の地域社会が出現した．

カトリック教徒であるアングロ・ノルマン（オールド・イングリシュ）はプロテスタントの入植者（ニュー・イングリシュ）が増加すると危機感をいだき，土着のアイルランド人との連携を深めた．1641年にアルスターで土地を奪われたアイルランド人が蜂起し，反乱はマンスターにまで広がった．しかし両者が連合してイギリス議会に対抗したカトリック同盟軍（キルケニー同盟）は崩壊した．

Across much of Ireland native Irish landowners had been dispossessed in favor of Protestants, and in Ulster the native population as a whole saw their position deteriorate as large numbers of Protestants were settled.

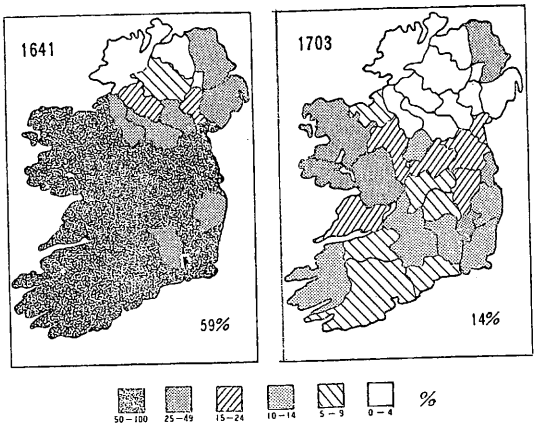
Discontent over land, religion and political status was to explode in the rising of 1641.[31)]

1649年1月，清教徒革命によりチャールズ1世が処刑されて内戦が終り，議会派が実権を握ると議会はアイルランドに注目した．カトリックに対する不信感はアルスターの植民者が受けた残忍な行為が誇張されて報告されたため急激に高まった．ダブリンに上陸したクロムウエルがアイルランドでおこなった大量虐殺と徹底的な土地の収奪はその復讐であった．

1603年には土地の大部分をカトリック教徒が所有していたが，1660年にはカトリック教徒が土地所有を許されるのはシャノン河の西とコナハト地方とクレア州のみになった．アイルランド問題は，宗教問題に劣らず土地問題が深刻であった．プロテスタントであるイギリス人地主とカトリックのアイルランド人の小作人という階層分化がますます顕著になっていった．

8　プロテスタント優位体制

17世紀末期には，イングランドにおける「名誉革命」の結果イングランド，オランダ及びアイルランドのプロテスタント勢力が支持する新国王ウイリアム3世と，フランス及びアイルランドのカトリック勢力が支持するジェイムズ2世が，アイルランドにおいて対峙しこの戦争にプロテスタント側のウイリアム3世が勝利をおさめた．この結果，アイルランドには，政治的・法律的には18世紀を通じて，社会経済的には19世紀末まで継続することになるプロテスタント優位体制が確立した．



（J.G.Simms）

By the Treaty of Limerick (1691) the Jacobites in Ireland surrendered, many, the 'Wild Geese', going to serve James in France. Ireland was then subjected to a Protestant ascendancy, which further entrenched the Protestant position in Ireland. The Catholics had held 59 per cent of the land in 1641, and 22 per cent in 1688. By 1703 this had fallen to 14 per cent, by 1788 to 5 per cent.[32)]

リメリック条約によりプロテスタントに主導権を握られたアイルランドは植民地的性格を強めた．イングランドが進めた重商主義政策によりアイルランドの商工業に対する統制が厳しさを増し，アイルランドは諸外国領や英領植民地との直接交易を禁じられ，また，イングランドの特定産業と競合するアイルランドの地場産業が抑圧された．つまり，アイルランドは航海法体制のもとでイングランドの植民地政策の犠牲になったのである．

このようなイングランドの姿勢にアイルランド側から不満が生じたのはいうまでもない．不満の声があがったのは，なによりもプロテスタント支配層のあいだからであり，そのためプロテスタント・ナショナリズムが勢力を伸ばした．同じ立場にあったアメリカ植民地の独立はアイルランドのプロテスタントに少なからざる影響を及ぼした．入植者から発せられた本国への不満，不信感はやがてアイルランド議会（Grattan's Parliament）が1779年の貿易上の規制撤廃，82年の立法権の独立を獲得する道を開いた．

一方，スコットランドは1707年の連合法によりイングランドに併合されていたが，スコットランドはこの時期までに共通の言語，共通の政治機構，共通の経済を所有していて，国民国家への道を放棄した代わりに，イギリス航海法体制の中に組み込まれ世界システムの中で活動することが可能になった．スコットランド人にはこれまでのケルト辺境人から「本国人」意識が高まっていった．[33)] 1603年の同君連合（personal union）により，南部英語がスコットランドの宮廷，行政，上流階級に広がっていた．このため言語によるコミュニケーションの障害は少なかった．

「やがてある日，スコットランドと想像されることになる地域の大部分が，すでに17世紀初頭には英語地域になっており，したがって，最低限の読み書き能力さえあれば出版英語をすぐに読むことができた．ついで18世紀初めには，英語を話すスコットランド低地人は，ロ

ンドンと協力してゲール語の根絶にあたった．いずれの「北進」においても自覚的なイギリス化政策が遂行されたわけではなく，イギリス化は基本的には副産物にすぎなかつた．しかし，こうした二つの過程は共に，ナショナリズムの時代到来の以前に，ヨーロッパ的な特定俗語と結びついた国民主義運動の可能性を効果的に排除してしまった」.[34)]

9　カトリック弾圧

1695年以降アイルランド議会でアイルランド刑罰法(Penal Code)の制定が進み，カトリック弾圧が始まった．1704年には旧教徒弾圧法(Act for Suppression of Papacy)が成立し，カトリックは経済活動を含めてほとんどあらゆる面で権利が大幅に制限され，厳しい貧窮と無力感に苛まれた．カトリックは刑罰法により次の事項を禁止された．

「宗教行為．教育を受けること．専門職，公職，商業に就くこと．自治都市およびその5マイル以内に居住すること．5ポンド以上の価値のある馬を所有すること．土地を購入および貸与すること．土地を担保にすること．投票すること．護身用の武器を持つこと．終身年金をもらうこと．プロテスタントから土地を購入，贈与，相続すること．プロテスタントから何かを相続すること．年30シリング以上の価値の土地を借りること．賃貸価の3分の1以上の収穫を上げること．子供の後見人になること．死亡時に遺児をカトリックに託すこと．カトリックのミサに出席すること．自分で子供に教育すること．子供のためにカトリックの教師を雇うこと．子供を海外に出して教育を受けさせること」.[35)]

1720年，イギリス議会はアイルランドの立法権を完全に掌握した．社会的なストレスと土地についての不満のため，アイルランドの各地でしばしば組織的な暴動が発生した．

アイルランド生まれのスウィフトがイギリスによる搾取政策を皮肉った『ドレイピア書簡』(Drapier's Letters)を書いたのが1724年である．

彼は，1726年『ガリバー旅行記』を刊行した．漱石は，『文学評論』でスウイフトの『愛蘭土に於ける貧家の児女を有用ならしめんとする卑見』を紹介している．「一歳位生長したところで，国中(the kingdom)の貴族あるいは富豪へ売附ける．…胡椒と塩で味を付けて，殺してから四日目位に茹でると丁度好い，冬は尚更然である…」[36)]

A lack of economic activity was linked to poverty, so that tenants lived 'worse than English Beggars'. In *Intelligencer* of December 1728 Swift argued that Irish impoverishment would lead to emigration to America.[37)]

10　ユナイテッド・アイリッシュマン

国内にとどまらず周辺地域に重大な影響を及ぼしたフランス革命はアイルランド人の不満をつのらせ，彼らを過激化させた．1791年，プロテスタントであるウルフ・トーン(W. Tone)はアイルランドの完全な自治とカトリックの解放(カトリック教徒の公職就任資格の回復)を目指し「宗派を問わずアイルランド人の友愛，権利擁護，力の結集」を目的にプロテスタント勢力とカトリック勢力を糾合する「アイルランド連合」(the United Irishmen)を組織した．彼は北部スコットランド人の論理性と南部アイルランド人の情念を結びつけた．彼の革命思想は農民が抱いている臆病と優柔不断を霧散させた．トーンはアイルランドでは傑出したフランス革命思想の鼓吹者であり，アイルランドの反逆者の理想となつた．「抑制の利いたアングロ・アイリシュの知性とアイルランド先住民(そのような純血のアイルランド人がその時代まで存続したとすればの話だが)の義憤が結びついたところに現代アイルランド民族主義の定式がある」.[38)]この運動はイギリス政府の弾圧下に続けられたが，「アイルランド連合」は次第にカトリック側の支援を求める方向に傾き，プロテスタントの支援を遠ざけるようになった．1798年には反乱が最高潮に達したが結局イギリス軍に鎮圧されて挫折した．

11　アイルランド併合

この反乱によりイギリス政府はプロテスタントによるアイルランド支配ではアイルランドを安定させることが不可能であると判断，1800年，連合法(Act of Union)によりアイルランドのグレート・ブリテンへの併合を決意し，1801年1月グレート・ブリテンおよびアイルランド連合王国が誕生した．こうしてウエストミンスターへ代表を送ることと引き換えにダブリンのアイルランド議会は廃止され，アイルランド国教会は「イングランド・アイルランド統一教会」(the United Church of England and Ireland)という英国国教会(Protestant Episcopal Church)に統合された．

天才的オルガナイザーであるオコンネル(D. O'Connell)は大衆動員によりイギリス政府に圧力をかけた，そのため政府は1829年，カトリック開放法案(Catholic Emancipation Act)を上程，可決した．この法律により，カトリックに対する差別は大幅に解消された．

The emancipation of 1829 opened the way to Catholic participation in parliament and to public office but of course these boons affected only a small educated and propertied elite.[39]

プロテスタントは統一主義を支持したが，カトリックは連合法の無効化と「ホーム・ルール」(アイルランド自治)を主張したのは当然のことであった．この併合はイングランドにとってもアイルランドにとっても苦難の第一歩となった．19世紀を通じて「イギリス内政の癌」といわれたアイルランド問題の種はこのとき播かれたのである．[40]

*　　*　　*　　*　　*

アイルランドに定住したアングロ・ノルマン(オールド・イングリッシュ)と土着のアイルランド人は連携してイングランドのプロテスタント勢力に対抗したが成功することは稀で，後退を繰り返し次第に土地は植民者の所有になった．17世紀から18世紀にかけてカトリック弾圧が強化され，イギリス重商主義政策のもとでアイルランドは植民地的性格を強め，カトリックは貧困に苦しんだ．しかし18世紀後半のアメリカ植民地独立の影響も大きく，アイルランドにプロテスタント・ナショナリズムが台頭した．出先のプロテスタントによる支配では限界があると判断したイギリス政府は強権でアイルランドを併合した．

カトリック教徒の不幸はアイルランド人の血に流れているケルト的民族性に最大の原因があり，地域主義が災いして民族としての統一を確立することが困難であったことである．金両基が「自力で外圧を防げなかったことを韓民族は厳しく反省しなければならない」[41]と冷静に書いているのを思い出すのであるが，時代背景も不運であった．協調主義がある程度の市民権を獲得しヴェルサイユ体制による民族自決主義(self-determination)の時代が来るのは遥かのちの第一次世界大戦後のことである．

注

1) 荻野治雄：「脱亜論」再考—その国際的背景と時代精神—東京家政大学研究紀要　第37集(1) 1997, p.7
2) 松尾太郎：アイルランド問題の史的構造，論創社，1980，p.161
3) 関根政美：エスニシティの政治社会学，名古屋大学出版会，1996，p.3
4) B・アンダーソン：想像の共同体，NTT出版,1997
5) 人口264万．ウエールズ語を話すことができるのは51万である．
6) 松尾太郎：アイルランド問題の史的構造，論創社，1980，p.172
7) 人口518万，大多数が英語を話し，ゲール語を話すことができるのは9.3万でしかない．
8) *Encyclopedia of the Languages of Europe*, Blackwell, 1998, p.250
9) サッカやーラグビーのワールドカップにこの4カ国が別々にナショナルチームを送り出している事実からも明白である．(谷川稔：国民国家とナショナリズム，(世界史リブレット)，山川出版社，1999, p.55
10) P.ベアレスフォード・エリス：アイルランド史[上]，論創社，1993，p.28
11) オフェイロン：アイルランド　歴史と風土，橋本槇矩訳(岩波文庫)，1993, p.32
12) オフェイロン：p.49
13) テリー・イーグルトン：表象のアイルランド，紀伊国屋書店，1997，p.60
14) T.W.ムーディ，F.X.マーチン：アイルランドの歴史と風土，堀越　智監訳，論創社，1987，p.166
「ノルマン人はアイルランド人自身よりもアイルランド的になった」というリンチのエピグラムは言いすぎであるとしても，歴史的に一片の真実がある．(オフェイロンp.106)
15) R.F.Foster, *The Oxford Illustrated History of Ireland*, Oxford University Press, 1991. p.88
16) 木畑洋一編：大英帝国と帝国意識，ミネルヴァ書房，1998，p.40
17) エリス，p.38
18) エリス，p.38

19) T.W.ムーディ，p.187
20) エリス，p.37
21) オフェイロン，p.118
22) K.O.Morgan, *The Oxford Illustrated History of Britain,* Oxford University Press, 1997, p.252
23) ムーディ，p.198
24) 北アメリカの初期植民の指導者たちは，すべてその最初の経験をアイルランドで得たのであり，イギリスは大西洋を跳び越える前にアイルランド海の彼方で定着することを学んだのであった．（ムーディー，p.196）
25) ムーディー，p.200
26) 松尾，p.173
27) Morgan, p.246
28) A.D.スミス：ネーション：ネーションとエスニシティ，名古屋大学出版会，1999，p.43
29) オフェイロン，p.121
30) ムーディー，p.211
31) Jeremy Black, *A History of the British Isles,* Macmillan Press Ltd, 1997, p.113
32) Black, p.145
33) 木畑洋一編，p.77
34) B・アンダーソン，p.152
35) オフェイロン，p.306
36) 漱石全集　第十巻,「文学評論」岩波書店，1975, p.317-19
37) Black, p.146
38) オフェイロン，p.155
39) Alvin Jackson, *Ireland 1798-1998,* 1999, p.35
40) 村岡健次・川北稔編，イギリス近代史，ミネルヴァ書房，1997，p.131
41) 金両基：アジアから見た日本，河出書房新社，1994, p.32

Summary

The Old English (Anglo-Normans) assimilated into Gaelic society (Catholics) toward the end of the 13th century. Many of them are said to have been more Irish than the Irish themselves. They were Catholics as native Irish people usually were. Ireland rejected Henry Ⅷ's Reformation. The English effort to make Irish people convert to Protestantism was fruitless on account of an Irish firm belief in Catholicism.

But toward the end of the 17th century Ireland was forced to be subjected to a Protestant ascendancy after all. In the beginning of the 18th century, Catholics were prevented from freely acquiring and bequeathing land or property by legislation of 1704. As a result of this transfer of land ownership, there was a paradigm established: Protestants were landowners and Catholics were their tenants.

Ireland was a victim of British ambition to colonize land, but Ireland was partly responsible for its demise. The reasons are that the Irish ways of thinking and behavioural patterns are not so much logical as emotional and individualistic, which are very characteristic of Celtics, thus the Irish were lacking in unity or integrity as an ethnic group. The purpose of English involvement in Ireland changed from acquiring lordship over men to colonizing land. But the Irish were defenseless to the Protestant invaders and helpless against new English policies.